



助手生活1年をふりかえって

道 奥 康 治*

昭和54年4月大阪大学工学部の助手に任官して以来、一年余が過ぎた。思えば、48年の入学以来7年半にわたり大学のお世話となっており、言うまでもなく、筆者の人生の中で最も長期間在籍している学校である。長年、大学に奉職されている多くの先生方から見れば、短期間のとるに足らぬ阪大とのかかわりではあるが、今回上記のような標題で筆者のまとまらぬ雑考を記す機会が与えられたので、以下の文は1人の人間のとるに足らぬ考えとして目を通して頂ければ幸いである。

大学生活において、学生時代の6年間と大学に勤務してからの1年半の二者を直接比較することはできないが、当然のことながらそのウェイトは後者がはるかにまさるようである。筆者のごとき学生生活を怠惰に送った者に感じる特有の虚無感かもしれぬが、なぜより有効に与えられた時間を案配し駆使できなかったか、アクティブに自己を啓発できなかったか等々反省ばかりである。自分には気づかぬ何らかの修得があったであろうと楽観的に考えるものの（このような後悔ばかりを書けば、御熱心に教育・研究指導を賜った諸先生方は概嘆されるであろうが）今さらながらに時間の貴重さを痛感する次第である。敢えて得たものはとふり返れば、このように自分に対するふがいなさを感じさせてくれた学生生活であったと考えるべきなのかもしれない。かくのごとき反省が今日の助手生活に多少なりとも役立っているのではないかと自身を激励しながら毎日を送っているわけであるが、任官後肌身に感ずる大学業務の多種多様さには未だになじんだとは言い難いであろう。言うまでもなく大学の二大使命である教育・研

究ならびにそれらに付随する各種雑務に対しては学生として傍観的に見ていた頃と、多少なりともそれらに直接たずさわる立場になった今とでは雲泥の感がある。私の所属する土木工学教室第二講座では、特に河川・湖沼・貯水池および河口部等一連の水系システムをいかなる人為的制御により社会生活に供するかを究極の目標とする水工学分野を専攻している。学問的側面はもちろんのこと、土木技術者として将来現場での応用を志す者にとって欠かせない分野の1つであるが故にその社会的要請は極めて大きいものである。講座配属の際、かくのごとき研究室の重責を理解できるはずはなく、それを熟考して現在の所属にあるわけではないが、研究室諸先輩とのディスカッション、数々の示唆・アドバイスによってこのようなものではないかと感じ始めているにすぎない。

このような助手二年目の筆者が大学はこうあるべきだなどという大それた意見を述べる資格は全くないが、これまで研究室で学んだ、あるいは教えて頂いて得た私自身の大学生活に対する私見を若干記したいと思う。その中には自明の理であったり明らかな誤ちを犯しているかもしれぬが、もし、この文を読んで何か反論をもたれる方がおられたら、どうか御教示願いたいと思う。今日の大学での研究は周知のとおり科学技術の高度な進歩に伴い、著しく細分化され専門化されている。したがって大学の最小構成単位である研究室の担当分野は研究室に所属する者から見れば多岐にわたるかもしれない。それが故に大学の存在価値もあろうが、学問が発達する程、それに対する社会的ニーズあるいは期待度が高まり、人間生活との結びつきはより堅固なものとなる。それらの要請に応え

*道奥康治 (Kohji MICHIOKU), 大阪大学, 工学部, 土木工学教室, 助手

るためには細分化された研究分野のカラの中に閉じこもることがあってはならず、研究方針が散漫化しない範囲内の広い視野に立った物の見方をする必要があろう。実際、無関係に思われる研究実績の中から何らかの示唆を得ることは多い。また、さらに人間との結びつきが深くなるほど社会とは独立に学問が先行することは許されず、また人との関わり合いをより重く考慮する必要がある。このことをあらわした例として、従来、治水あるいは利水という形で人間とともに歩んできた河川は、現在、淀川河川敷公園に代表されるような日常生活の場としての機能を有するに至っており、これから将来の河

川工学はそういった人間生活の中での河川という物の見方をすべきだという意見がある。これは、まさしく当を得た意見だと考える。人間が自然を克服し、河川を人工のものとして手を入れていけばいくほど、人間とのかかわりを念頭に入れた利用形態の必要性がせまられる。これと同様のことは他の学問分野についても言えるのではなかろうか。その中で大学の果す役割が大きいことは言うまでもなく、筆者も微力ながらそれに所属する一員として前向きに活動する所存である。

最後にこのような劣文を読んで頂いた読者諸兄に深謝する。



限りある資源を大切に……

の姿勢を守るDNT

現在は、“鉄の文明”と評され、今日の世界から鉄を無くしたら、恐らく一切の文化は終息するだろうといわれています。

DNTは、創立の礎となった重防食塗料「ズボイド」を通じて既に半世紀近く私たちの大切な鉄を守りつづけてきました。

そして、これからもDNTはズボイドを生みだした重防食技術をベースに、独自の技術開発を進め、さらに、海外の優れた技術と協力しあって、より優秀な重防食システムとして結合させ、限りある資源を守りつづけていきます。

●創造と調和をめざす●



DNT

大日本塗料

●大阪市此花区西九条6-1-124
〒554 ☎(06)461-5371(大代)

●東京都千代田区丸の内3-3-1
〒100 ☎(03)216-1861(大代)